

駒形神社の春まつり

今年も本格的な農耕シーズンがやってきました。田畑ではトラクターや田植え機が大活躍。3月末から4月末にかけて、豊作と家内安全を祈願する春まつりも、市内各所の神社で行われます。

【大きく変わった農事暦と農作業】

市内の早い田んぼでは4月下旬に行われ、5月末には、ほぼ終わっている田植え。昭和30年代までは、梅雨真っ盛りの6月が最盛期でした。

多くの水稻は、かつては4月に入ってから田を起し、下旬から苗代の準備をして5月初旬に種を播き、苗が育つ間に、茶摘と製茶、養蚕（春蚕）、葉煙草の土寄せ、大麦刈りなどを行って、田植えは7月中旬の祇園祭までに終わらせるといった具合でした。

今年の暦の上での入梅は6月10日。旧暦では5月6日です。「五月雨（さみだれ）」が梅雨時の降雨を示す言葉であることも、いつか忘れられてしまうでしょう。

農業機械のない当時、作業はもちろん鋤や鍬等を使っての手作業。そのような農作業の道具（？）の中で、最も高価で頼りになったのが“馬”でした。

【馬とともにあった人々の暮らし】

農作業に力を発揮する上、厩肥を有効に活用できるとして、水戸藩では馬の増産を図っていました。最も力を入れたのが、幕末の藩主 烈公こと徳川斉昭で、水戸郊外に桜野牧を開設した他、里子駒や仕法馬（※注）の制度を用いて、農家への馬の普及を進めました。この政策は藩の思惑通りにはいかず、制度を緩和し、飼育も売買も自由にしてから農民の生産意欲が高まり、多賀・久慈・那珂3郡の山村は、水戸駒として他領へも産馬を流通させるほどの馬産地となりました。

馬は今で言えば、耕うん機であり軽トラック。飼育に手間は掛かりますが、馬のおかげで重労働がどれだけ軽減され、作業効率が高まったか、我々の想像では計り知れません。また、馬は愛情をもって接すれば応えてくれる、心優しい家族の一員でもありました。

【馬の神様 駒形神社】

この大切な馬を守護する神を祀るのが駒形神社で、本社は南部駒で有名な岩手県水沢市にあります。関東・東北地方に分社が数多く分布しており、市内にも「駒形神社」と文字を彫った石塔が散見され

尺丈山頂の駒形神社への参道▶



るほか、美和地域高部の尺丈山々頂に駒形神社があります。標高511mの頂上は、奥久慈の山々の展望がすばらしく、運がよければ日光や那須の連山はもちろん、富士山まで望むことができます。さらには市内一の高所でありながら、稜線は思いのほか広く長く、神社へ続く桜並木の参道となっています。

戦後間もなくまで、この神社で行われてきた春まつりには、周辺地域に住む人々が飾り立てた飼馬を曳いて山頂の社に詣で、これからの農繁期の馬の健康と豊作を祈願するとともに、山上の桜並木で競馬に興じたとのことです。農馬まで軍馬として徴用され、戦後は著しく馬も減っていたためか、この祭礼は時をおかずに行われなくなってしまったようです。すでに祭日も不明確ですが、神社周囲の3基の石塔に刻された日付から、祭礼の日は旧暦3月17日であったと思われます。今年は新暦4月23日にあたります。

明治7年3月17日に建てられた石塔▶



【茨城県北版チャグチャグ馬ッコ】

皆さんすでにお気づきでしょう。このお祭りは、岩手県盛岡地域で行われる有名な民俗行事、着飾らせた馬を連れて駒形蒼前神社に参詣し、馬の健康と安全を祈る「チャグチャグ馬ッコ」と同類です。しかも、当地で飾り立てた馬を曳いて詣でる山上の社寺は他にもあり、緒川地域大岩・小舟周辺の人々は、栃木県の烏山・茂木境の松倉山へ、久慈川流域の人々は西金砂山へと登ったそうです。

西金砂神社境内の駒形神社は、祭日が西金砂本社の春季例祭と同日（今は4/20）であったため、春まつりは今でも「駒形さん」の名で親しまれています。美しい馬を連れての参詣は昭和30年代まで見られ、参道で競馬も行われたとのこと。西金砂神社の春まつりに参詣した人々の間では、種駒の交換が行われたとも伝えられます。

山桜の咲く季節、市内各所の山中に、農作業から解放され晴れ姿でかっ歩する駒の、いななきが響いた時代があったのです。

注：里子駒は、藩がメス馬を農民に預け、増産した仔馬3匹を藩に納付すると、預かったメス馬を与えられる制度。仕法馬は、馬を持たない農家に対して藩が馬を先渡しし、その代金を貸し付けて、利息1割3年賦で返済させる制度。

※今回の取材にあたり、高部諏訪神社宮司の高部孝夫氏と西金砂神社宮司の中嶋又実氏にご協力いただきました。次回からの「ふるさと見て歩き」は、歴史文化振興室が担当します。